

経題

インド語で、アールヤ・ヴァジュラ・ツツエダカ・ナーマ・プラジュニャー・パラミタ・マハーヤナ・ストトラ。
チベット語で、聖なる彼岸に行く金剛の刃と言われる大乘の経典。

帰敬文

一切の仏と菩薩に敬礼する。

序段

このようにある時、私は聞いた。

世尊は舍衛城のジェータ林の給孤独園に、1250人の出家者の大きな集団と、非常に多くの菩薩大士方と一緒に
おられた。

そして世尊は朝の時、下衣と上衣に身を包んで、鉢を取り舍衛城の大きな町に托鉢に入られた。そして世尊は舍
衛城の大きな町を托鉢されてから、施物の食べ物を召し上がり、食事の作法をなさってから、食後の施物を捨施
して、鉢と衣を収めて足を洗って、座に結跏趺坐してから身をまっすぐになさって、念をおさめてから、たたずま
れた。

そしてたくさんの比丘は、世尊のおられる場所まで進んで行ってから、世尊の足に頭をつけて敬礼して、世尊に
さらに3回繰り返してから一つの場所に座った。

またその時、長老須菩提は会座の中にいた。それから長老須菩提は座から立ち上がって、上衣を一方の肩にかけ
て現し、膝を右の膝がしらを地につけてひざまずいて、世尊のおられるところの傍に合掌してたたずんで、世尊
にこのように申し上げたのである。

菩薩乗に入る者の心がまえ

世尊よ、如来、阿羅漢、正しく成就された悟りを完成した仏によって、菩薩大士方に援助の最高のものが種々に
与えられており、如来、阿羅漢、正しく成就した仏によって菩薩大士方は恩恵の最高のものが種々に任されてい
ることが。世尊よ、すばらしく良いです。善逝よ、すばらしく良いです。世尊よ、菩薩乗に正しく入るものは、
どのように住すれば良いか。どのように完成すればよいのでしょうか。どのように最高に心を集中すればよいの
でしょうか。

そのように申し上げたので、世尊は長老須菩提にこのようにお説きになった。

須菩提よ。良い。良い。須菩提よ。その通りである。その通りである。如来は、菩薩大士たちに対し、援助の最
高のものによって手助けしているのである。如来は菩薩大士たちに対し、委託の最高のものによって完全に託し
ているのである。須菩提よ。その故に非常に良く聞き、心に刻みなさい。そして、菩薩乗に正しく入るものはど
のように住すれば良いか、そして、どのように完成すべきか、そして、どのように最高に心を集中すべきか、
私は汝に説くであろう。

世尊よ、おおせの通りであります。と申しあげて、長老須菩提が世尊にお答えすると、世尊はこのように教えを
述べられたのである。

衆生教化しても、それを為したという心を起こすべきではない

須菩提よ。菩薩乘に正しく入りたいと思うならば「私は、およそ衆生の集まりの集団、卵から生まれたものであれ、胎から生まれたものであれ。湿気から生まれたものであれ、突然生まれたものであれ、形あるものであれ、形なきものであれ、想いのあるものであれ、想いのないものであれ、想いがあつたりなかつたりするものであれ、衆生界の感覚を持つと考えられるどんなものであれ、それらのすべてを残りなく涅槃の領域に完全に入らせ、苦しみから救済するのである。このように無数の衆生を完全に苦しみから救っても、完全に苦しみから救われている衆生は存在しないのである」と考える心を起こさなければならない。それはなぜかというならば、須菩提よ。もし菩薩が次のような考え方もつならば、菩薩と言つてはならないからである。それはなぜかというならば、須菩提よ。およそ衆生という考え、または、生命という考え、または、人間（ブドガラ）であるという考えを持つならば、菩薩とは言つてはならないからである。

布施をするときの心構え

また、須菩提よ。菩薩は、物事に止まらないで布施をするのである。法にも止まらないで、布施するのである。ものにも止まらないで布施するのである。音にも、香りにも、味にも、触覚にも、法にも止まらないで布施するのである。須菩提よ。どんな本質も存在する、と考えることにも止まらずに、菩薩は布施をするのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。菩薩が住しないで布施する福德の集まりは、須菩提よ。量ることが簡単ではないからである。須菩提よ。これをどう思うか？東の方の虚空を量るのは簡単だろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ、それは、そうではありません。

世尊はお答えになった。同じように、南と、西と、北と、東と、下方と、中間と、十方の虚空を量るのは、たやすいだろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ、それは、そうではありません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。同様に、住しない布施をする菩薩の福德の集まりも、量ることがたやすくないのである。

相好（仏にあるとされる、他とは異なるすばらしい特徴）によって仏であると見てはならない

須菩提よ。これをどう思うか？すばらしい特徴によって、如来は見られるだろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ、それは、そうではありません。すばらしい特徴によって、如来は見られません。それはどんな理由かと申しますと、如来がすばらしい特徴と言われる、真実のすばらしい特徴は現れないからです。そのようにお答えした。

そして、世尊は長老須菩提に答えて、このようにおっしゃった。

須菩提よ。これはどのように思うか？素晴らしい特徴は実に誤りである。なぜなら、素晴らしい特徴がないことが、実に間違いでないのである。そのように、如来に特徴と、そして特徴が無いことを見なさい。とお答えになった。

未来にこの經典の説を信じるものが現れる

そして、世尊に長老須菩提は、このようにお尋ねした。

世尊よ。未来の最後の500年に、正しい教えが完全に破壊される時に、衆生の誰かが清浄な、このような經典の最高の説に対して、正しい認識を起こすような者があるのでしょうか？

世尊はおっしゃった。須菩提よ。汝はこう言った。未来の最後の500年に、正しい教えが完全に破壊される時に、衆生の誰かが、清浄なこのような經典の最高の説に対して、正しい認識を起こすような者があるのでしょうか？と、そのように言うてはならない。また、須菩提よ。未来の最後の500年に、正しい教えが完全に破壊される時に、戒を具えた、徳を具えた、智慧を具えた大菩薩たちが現れる。須菩提よ。これらの菩薩大士方も、一人の仏に対して帰依したのではない。一人の仏に対して徳の根を植えたのではなく、須菩提よ。百千の仏に対して尊敬し、かつ、無数の仏に徳の根を植えた菩薩大士方が現れるのである。須菩提よ。このような經典の教え、これに対して一念でも信心を得る者たちは、須菩提よ。如来によって認められるのである。須菩提よ。彼らは、如来がご覧になられるのである。須菩提よ。これらすべての衆生たちは、計り知れない福德の集まりを生じつつ、完全に集めるであろう。それはなぜかというならば、須菩提よ。それらの菩薩大士方は、我との想いを生じないであろうし、衆生との想いをしないし、生命との想いをせず、人間（ブドガラ）との想いを生じないだろうからである。須菩提よ。菩薩大士方は法にも、非法にも想いを入れない。それらは、想いと、想いでないものにも、想いを入れることにはならないだろう。それはなぜかというならば、須菩提よ。もし菩薩大士方が、法に想いを入れるならば、そのことが、それらの自性を認識することになるし、衆生との想いと、生命との想いと、人間（ブドガラ）との想いになるからである。もし非法に想いを入れても、それ自体、それらの自性に対する認識になるし、衆生との想いと、生命との想いと、人間（ブドガラ）との想いになるからである。それはなぜかというならば、また須菩提よ。菩薩は法も誤って理解しないであろうし、非法も理解しないからである。それゆえに、それから考えて、如来は、この法話が船のようなものであると認識することによって、諸法も見捨てられなければならないとすれば、もろもろの非法は言うまでもないとおっしゃったのである。

さらに、仏は長老須菩提にこのようにおっしゃった。

そもそも、仏の説いた法（教え）は、存在するのか？

須菩提よ。これはどのように思うか、如来が、この上ない正しく成就された完全なる悟りに、仏法は何か有るのか？如来が教えた法はあるのか？

そのようにおっしゃり、そして、長老須菩提は、仏にこのようにお答えした。

世尊よ、世尊がおっしゃったこの意味は、私が探求しましたならば、如来がこの上なく正しく成就された完全なる悟りに、如来の法は何もございません。如来が教えた法は何もございません。それはなぜかと申しますならば、如来によって、直観において成就した悟りとして説かれた法は、把握されることがございませんし、話されることがございません。それは、法でもございませんし、非法でもないからです。それはなぜかと申しますならば、聖なる人々は、集めない行い（無為）によって完全に識別するからです。

經典を護持する功德

世尊はおっしゃった、須菩提よ。これをどのように思うか、良家の息子であれ、良家の娘であれ誰かが、この三千大千世界を七宝で完全に満たして、布施するならば、良家の息子であれ良家の娘は、それに基づいてそれから、

たくさんの福德の集合を作るであろうか？

須菩提はお答えした。世尊よ、たいへんに多いのです。善逝よ、たいへんに多いのです。良家の息子であれ、良家の娘は、それに基づいてそれから、たくさんの福德の集合を作ります。それはなぜかと申しますと、世尊よ、福德の集合それ自体が、集合ではないからであります。ゆえに、如来は福德の集合は、福德の集合であるとおっしゃったのです。と申し上げた。

世尊はお答えになった。須菩提よ。良家の息子であれ、良家の娘の誰かが、この三千大千世界を七宝で完全に満たした布施をするよりも、誰かがこの法話から、わずか4句の詩のうちの1つだけでも、認識してから他の者たちにも説明して、正しく完全に教えるならば、それに基づいてそれから、非常に大きな福德の集合を、無数に計り知れないほどに生み出すのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来、阿羅漢、正しく悟ったものたちの、この上なく正しく成就された悟りは、これから現れるのである。仏世尊たちも、これから生まれるからである。それはなぜかというならば、須菩提よ。仏の諸法、仏の諸法というものは、それらは仏の法でない、と如来がおっしゃっておられるからである。ゆえに、仏の諸法と言われるのである。

四向四果（仏道の成就段階）はそもそもありえるのか？

須菩提よ。これをどのように思うか、預流（流れに入ったもの）は、私は流れに入った者の結果を成し遂げたとするであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ。それはそうではありません。それはなぜかと申しますならば、世尊よ。彼は何にも入ることはないからであります。ゆえに、流れに入るとされるのであります。色にも入らず、声にもなく、香にもなく、味にもなく、触覚にもなく、現象にも入らないのです。ゆえに、流れに入るとされるのであります。世尊よ、もし流れに入ったのものが、私は流れに入った者の結果を成し遂げたとするならば、そのことが、その自性を認識することになるのであります。衆生との想いと、生命との想いと、人間（プドガラ）との想いになるのであります。

世尊はおっしゃった、須菩提よ。これをどのように思うか、一來（一度だけ輪廻に帰ってくる）のものが、私は一來の結果を得た、とするであろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ、それは、そうではありません。それはなぜかと申しますならば、一來自体に入る法も存在しないからであります。ゆえに、一來とされるのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、不還（二度と輪廻に帰ってこない）のものは、私は不還の結果を得た、とするであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ。それは、そうではありません。それはなぜかと申しますならば、不還自体に入る法も存在しないからであります。ゆえに、不還とされるのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、阿羅漢（煩惱を完全に断つたもの）は、私は阿羅漢を得た、とするであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、それは、そうではありません。それはなぜかと申しますならば、阿羅漢とされる法も存在しないからであります。世尊よ、もし阿羅漢が、私は阿羅漢を得たという、思いになるならば、そのことが、それらの自性を認識することになるのであります。生き物との想いと、生命との想いと、人間（プドガラ）との想いになるのであります。世尊よ。私は、如来、阿羅漢、正しく成就した悟りによって煩惱なく住するものたちの、偉大さを教えるのです。世尊よ。私は欲望から解放された阿羅漢でございませけれども、世尊よ、私は、「私は、阿羅漢なのである」とは思わないのであります。世尊よ、もし私が、私は阿羅漢自体を得たと、思うようになるならば、如来は私に「良家の息子須菩提は、煩惱のないことに住する者たちのうちで最高のものであって、何にも住しないから、煩惱のないことに住する者、煩惱のないことに住する者である」と授記されないので

す。

如来が過去仏から受けた法があるのか？

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、如来が、如来、阿羅漢、正しく成就した燃燈仏から受けた法は、何かあるであろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ。それは、そうではありません。如来が、如来であり、阿羅漢であり、正しく成就した燃燈仏から受けた法は、何もございません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。菩薩の誰かが、以下のように言う。「私は、諸々の仏国土を完成しなければならない」と。このように言うならば、それは、真実でないことを語るなのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。諸々の仏国土、諸々の仏国土と言われるのは、それらに設立がないことであると如来はおっしゃっているからである。ゆえに、諸々の仏国土とされるのである。須菩提よ。そのようであるならば、菩薩大士は、このように住しない心を起こさなければならない。何にも住しない心を起こさなければならない。色形にも住しない心を起こさなければならない。音にも、香りにも、味にも、触覚にも、法にも住しない心を起こさなければならない。

何にも住しない心を起こしたことの功德

須菩提よ。このようにして、たとえば、ある人の体が、以下のようになるならば、すなわち、山の王である須弥山のようになるならば、須菩提よ。これをどのように思うか、この体は大きいであろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ。その体は大きいのであります。善逝よ、その体は大きいのであります。それはなぜかと申しますならば、如来は、その実体は存在しないとおっしゃったからです。ゆえに、体とされるのであります。その実体が存在しない如来がおっしゃったのです。ゆえに、大きい体とされるのです。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか。ガンジス川のある限りの砂粒ほどのガンジス川も、実にそれほどなるなら、それらの砂粒は多いであろうか？

須菩提はお答えした。世尊よ。それらのガンジス川自体も多いのでありますならば、それらの砂粒などは言うまでもありません。

世尊はおっしゃった。須菩提よ。汝は信じなければならない。汝は理解しなければならない。ガンジス川のある限りの砂粒、それほどの世界を、男あるいは、女の誰かが、七宝で完全に満たして、如来・阿羅漢・正しく成就した仏たちに布施するならば、須菩提よ。これをどのように思うか。その男あるいは女は、それに基づいて多くの福德を生じるであろうか？

須菩提は申し上げた。世尊よ、たいへんに多いのです。善逝よ、たいへんに多いのです。その男あるいは女は、それに基づいて、多くの福德を生み出すのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。誰かがある限りの世界を、七宝で完全に満たして如来・阿羅漢・正しく成就した仏に布施するよりも、誰かがこの法話から、わずか4句の詩だけでも、認識してから他の者たちにも解説して、正しく教えるならば、そのことが、これに基づいてそれから、計り知れないほど多くの福德を生み出すのである。また、須菩提よ。どこかの土地でこの法話から、わずか4句の詩句だけでも唱えられ、そして、唱えられた土地で、神と、人と、阿修羅と一緒に暮らす世界の拠り所となるならば、誰でも、この法話を受け入れるものと、認識するものと、読むものと、すべてを理解するものと、正しく念じるものは、最もすばらしいものを具えるような者になるのは言うまでもなく、その土地で説く者も住み、特別な上師（如来）の住む場所も住するので

ある、とお答えになった。

この經典の名前とそれがありえないこと

そして、世尊に長老須菩提はこのようにお尋ねした。世尊よ、この法話の名前は何かでありますか？どのように認識すればよいですか？

そのように申し上げたので、世尊は長老須菩提に答えて、このようにおっしゃった。須菩提よ。この法話は「智慧の彼岸に行く（般若波羅多）」といわれる。これはそのように認識しなさい。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来が「智慧の彼岸に行く」を説くことは、それ自体、彼岸に行くことではないからである。ゆえに「智慧の彼岸に行く」といわれるのである。須菩提よ。これをどのように思うか、如来が説いた法も、存在するだろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、如来がお説きになった、それらの法も存在しないのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか。三千大千世界の土地の原子と同じくらい多いものは、多いであろうか？

須菩提はお答えした。世尊よ、土地の原子は大変に多いのです。善逝よ、たいへんに多いのです。それはなぜかと申しますならば、世尊よ、土地の原子であるということは、原子が存在しないことであると如来はお説きになられたからです。ゆえに、土地の原子とされるのです。世界であるものは、領域（界）でないと如来はお説きになられたからです。ゆえに、世界とされるのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、32の偉大な人の特徴は、如来・阿羅漢・正しく成就した仏に見られるか？

須菩提は申し上げた。世尊よ、それは、そうではありません。それはなぜかと申しますならば、如来が説かれた32の偉大な人の特徴は、特徴ではない、と如来がお説きになったからであります。ゆえに、如来の32の特徴とされるのであります。

世尊はお答えになった。また須菩提よ。男あるいは女の誰かが、ガンジス川の砂ほど多くの体をすっかり与えるよりも、誰かがこの法話から、わずか4句の詩だけでも、認識してから他の者たちにも教えるならば、それに基づいてそれから、非常に大きな福德の集合を、無数に計り知れないほどに生み出すのである。

須菩提の讚嘆とここまでのまとめ（ここまでが第1段）

そして長老須菩提は、法の力によって涙を流して、そうした後から、如来にこのように申し上げた。このような法話が、如来によって説かれたことは、世尊よ、すばらしく良いです。善逝よ、すばらしく良いです。世尊よ、私の智慧として現れる範囲内で、私はこれ以前にこの法話を聞いたことがないのです。世尊よ。この經典の説に対して、想いを生じるようになる衆生たちは誰でも、もっともすばらしいものを具えた者になるのであります。それはなぜかと申しますと、世尊は、およそ正しい想いのある者は、想い自体が存在しないから、ゆえに、正しい想い、正しい想いと言われるのである、と、如来はおっしゃったのであります。世尊よ、私がこの法話についての説明に関して、考えて信じることは、私においては信じることではないのですが、世尊よ、後の時、最後の500年に、この法話を受け入れ、認識し、読み、すべてを理解する衆生たちは、もっともすばらしいものを具えた者になるのであります。また世尊よ。彼らは、我との想いを生じないであろうし、衆生との想いと、生命との想いと、人である、という考えを持つことにならないのであります。それはなぜかと申しますならば、世尊よ、私との想いと、衆生との想いと、生命との想いと、人間（ブドガラ）との想いがあることは、想いではないから

であります。それはなぜかと申しますならば、仏世尊たちは、一切の想いと離れているからであります。そのようにお答えした。

般若波羅蜜は、如来が述べられた教えである

そして、世尊は長老須菩提に答えて、このようにおっしゃった。

須菩提よ。その通りである。その通りである。この經典の説に怯えない人と、混乱しないような衆生は、非常に素晴らしいものを具えたものになるのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。この最高の智慧の彼岸に行く教えは、如来によって述べられたのである。最高の智慧の彼岸に行く教えは、如来によって述べられたのである。数えきれないほどの仏世尊方によっても述べられたからである。ゆえに、最高の智慧の彼岸に行くといわれるのである。また、須菩提よ。如来の受け入れる「智慧の彼岸に行くこと」は、「智慧の彼岸に行くこと」ではないのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。カリンガの王によって私の手足と、主要な部分をばらばらに切られた時、私には我との想いも、衆生との想いも、生命との想いも、人間（ブドガラ）であるとの想いも生じなかったし、私にはいかなる想いもない、という、想いでないものになることも存在しなかったからである。それはなぜかというならば、須菩提よ。もしその時、私に我との想いが生じたならば、その時、悪意の想いも生じて、衆生との想いと、生命との想いと、人間（ブドガラ）との想いが生じるならば、その時、悪意の想いも生じたであろうからである。須菩提よ。私ははっきりと知る。過去の時における私は500の生の連続において忍辱を語るものと言われる仙人になって、その時も私に我との想いも、衆生との想いも、生命との想いも、人間（ブドガラ）との想いも生じなかったのである。須菩提よ。それゆえに、菩薩大士はすべてを捨てて、この上なく正しく成就された悟りに心を起こさなければならない。色にも住しない心を生じなければならない。音にも、香りにも、味にも、触覚にも、法にも止まらない心を生じなければならない。非法にも止まらない心を生じなければならない。いかなるものにも住しない心を生じなければならない。それはなぜかというならば、およそ住することそれ自体が、住することではないからである。ゆえに、如来はこのように言われた。菩薩は住しないで布施するのである、と。また、須菩提よ。菩薩はこのように、一切衆生の利益のために、布施を完全に与えなければならない。およそ衆生との想い、それ自体も想わないのである。如来が一切衆生と述べられたこと、それ自体もないのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来は、正しく語る者、真実に語る者、ありのままに語るものである。如来は、間違いなく、ありのままを語るものであるからである。また須菩提よ。如来が完全に悟った法、あるいは、説いた法に関しては、真実でもなく、誤りでもないのである。須菩提よ。このようにして、たとえば、目の良い人は闇に入っても、その人は見ることができるように、彼は、真実であるという概念に陥らないことによって、完全に布施する菩薩を見るのである。須菩提よ。このようにして、たとえば、目の良い人は、日没から日の出まで、様々な形のものを見ることができるように、彼は真実であるという概念に陥らないことから、完全に布施する菩薩を見るのである。また、須菩提よ。良家の息子であれ、良家の娘であれこの法話を受け入れ、認識し、読み、すべてを理解し、他の者にも広めて正しく教える者たちは、如来によって認められた彼らを、如来はご覧になるのである。これらすべての衆生たちは、計り知れないほどの福德を、生み出すようになるのである。また、須菩提よ。男であれ、女であれ誰でも、朝にガンジス川の砂の数ほどの身体を完全に与え、昼と、夕方にもガンジス川の砂の数ほどの身体を完全に与えて、このようにして、10万の10万劫ほどの、それほど多い身体を完全に与えるよりも、この法話を聞くことをやめないならば、そのことに基づいてそれから、計り知れないほど多くの福德を生み出すならば、誰かが書写してから受け入れ、認識し、読み、完全に理解し、他の者たちにも広めて、完全に正しく教えるようなことは、言うまでもないのである。また須菩提よ。この法話は、不可思議であり、同じものがない。この法話は、もっとも高い乗り物において、正しく成就した衆生たちの目的であり、高貴な乗り物において、正しく成就した衆生たちの目的であるから、如来が説かれたのである。この法

話を受け入れ、認識し、読み、完全に理解し、他の者にも広めて正しく教える者たちは、如来によって認められる。彼らは、如来がご覧になられるのである。これらすべての衆生たちは、計り知れない福德の集まりを具えたものになるであろう。福德の集合を実現することによって満たされないものと、比較できないものと、限界のないものと、量ることができないものになるであろう。それらすべての衆生たちは、私の悟りを肩に担うものとなるであろう。それはなぜかというならば、須菩提よ。劣った信仰を持つ者たちは、この法話を聞くことはできない。我と見る者たちによってではない。衆生と見る者たちによってではない。生命あるものと見る者たちによってでもなく、人間（プドガラ）として見るものたちによって聞かれることと、受け取ることと、認識することと、読むことと、完全に理解することが出来ない。それは、住することがないからである。また、須菩提よ。この經典がある土地は、この教えが説かれる土地であって、神と、人と、阿修羅が一緒にいる世界にとって必要になるのである。その土地は尊敬に値するし、巡礼しなければならないようにも、またなるのである。その土地は、塔廟のようになるのである。須菩提よ。良家の息子であれ良家の娘であれ、このような經典の言葉を受け入れ。認識し、読み、完全に理解する者たちは、迫害されるであろう。ひどく迫害されるであろう。それは、なぜかというならば、須菩提よ。それらの衆生たちは、以前の輪廻の悪い行為によって、悪い生存状態に生まれるであろう行いを、今世に苦しむことによって、以前の輪廻の悪い行為を浄化するようになる。仏の悟りも成し遂げるようになるからである。須菩提よ。私ははっきりと知る。過去の世の無数カルパの数えきれないカルパにおいて、如来・阿羅漢・正しく成就した燃燈仏の他のまた他の劫において、100万劫の10万の八十四倍の仏が現れて私はお仕えした。お仕えしても満足しなかった。須菩提よ。これらの仏世尊方に対し、私がお仕えして満足しなかったことと、後の世の最後の500年に、この經典を受け入れ、認識し、読み、完全に理解することを比べるならば、須菩提よ。福德の集まりにおける福德の集まりの、わずか100分の1にもならない。千分の1にも、十万分の1にも、数えることも、分けることも、計算と、たとえと、対象と、特徴とするにも耐えられないのである。須菩提よ。もしそのとき、良家の息子あるいは良家の娘の、それほど多くの福德の集まりを認識するようになる良家の息子、あるいは良家の娘たちの福德のあつまりを私が語るならば、衆生たちは狂人になるであろう。動揺した心になるであろう。また、須菩提よ。この法話を理解できないのである。この行為の成熟も理解できないことを、知らなければならないのである。

改めて、菩薩乗に入る心構えを問う

そして、世尊に長老須菩提はこのようにお答えした。世尊よ、菩薩乗に正しく入るものは、どのように住せばよいのでしょうか。どのように完成したらよいですか？どのように心に完全に保ったら良いのでしょうか？

世尊はおっしゃった、須菩提よ。菩薩乗に完全に入りたいと思うならば、こう考えよ。「私によって、すべての衆生たちの集団が、残りなく涅槃の領域において、完全に煩惱から解放されるのである。そのように衆生たちが煩惱から完全に開放されても、完全に煩惱から解放される者はいないのである」と、考える心を起こさなければならない。それはなぜかというならば、須菩提よ。もし菩薩に想いが生じるならば、菩薩と言ってはならない場合に、人間（プドガラ）との想いが生じるならば、彼もまた、菩薩と言われなければならないからである。それはなぜかというならば、須菩提よ。菩薩乗において正しく成就されると言われる法は、何も無いからである。須菩提よ。これをどのように思うか。如来が燃燈仏の所で、この上なく正しく成就された悟りの直観において成就した仏の法は、あるのだろうか？

そのようにおっしゃったので、世尊に長老須菩提はこのようにお尋ねした。世尊よ。如来が燃燈仏の所で、この上なく正しく成就された悟りの直観において成就した仏の法は、存在しません。そのようにお答えした。

そして、世尊は長老須菩提に答えてこのようにおっしゃった。須菩提よ。その通りである。その通りである。如来が、燃燈仏の所で、この上なく正しく成就された悟りの直観において成就した仏の法は、何も存在しないので

ある。須菩提よ。もし如来によって直観において成就された仏の法が、何かあるならば、燃燈仏が私に「バラモンの子よ、汝は未来の時に、如来阿羅漢正しく成就した仏、釈迦牟尼と言われるようになるだろう」と、授記されなかったであろうが、須菩提よ。このように、この上なく正しく成就された悟りの直観において成就した仏の法は、何もないから、この故に、燃燈仏が、「バラモンの子よ、汝は未来の時に、如来、阿羅漢正しく成就した仏である釈迦になるであろう、と言われるようになるのだ」と授記されたのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来とは、正しくありのままであることの呼称であるからだ。須菩提よ。誰かがこのように言う。「如来、阿羅漢、正しく成就した仏は、この上なく正しく成就した悟りの直観において目覚めたのである」と。このように言うならば、彼は誤りを語るのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来がこの上なく正しく成就された悟りの直観において成就した悟りの法は、何もないからである。須菩提よ。如来が直観において成就した法に、真実は無。誤りも無いのである。ゆえに、如来にとって、一切の法が仏の法なのである、とおっしゃった。須菩提よ。一切の法というのは、それらは一切の法ではないのである。ゆえに、一切の法が、仏の法と言われるのである。

須菩提よ。このようにして、たとえば、体を持つある人の体が、大きくなるようなものである。

長老須菩提はお尋ねした。世尊よ。如来が、体を持つある人の体が大きくなるとおっしゃるのは、如来が、体は存在しない、とおっしゃることです。ゆえに、体を持つものであって、体が大きいと言われるのです。

世尊はお答えになった。須菩提よ。その通りである。ある菩薩が、このように言う。すなわち「私によって衆生たちは完全に煩惱から解放されるのだ」と。そのように言うならば、菩薩と言ってはならない。それはなぜかというならば、須菩提よ。菩薩と言われる者の法は、何かあるであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、それは、存在しないのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。ゆえに、如来は一切の法が、衆生でないものと、生命がないものと、人間（ブドガラ）でないものである、とおっしゃったのである。須菩提よ。ある菩薩がこのように言う。すなわち「私は諸々の仏国土を完成するのである」と。そのように言うならば、彼もまた、同様であると言われなければならない。それはなぜかというならば、須菩提よ。仏国土、仏国土というものは、それらは国土でない、と如来がおっしゃったからだ。ゆえに仏国土と言われるのである。須菩提よ。菩薩という法は、無我なのである。諸法は、無我なのである、と信じることは、如来、阿羅漢、正しく成就した仏によって、菩薩である、菩薩である。と言われることである。

如来とはどのような存在であるか？

須菩提よ。これをどのように思うか、如来に肉眼はあるだろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、実にその通りです。如来に肉眼はございません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、如来に天眼はあるだろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、実にその通りです。如来に天眼はございません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、如来に智慧の眼はあるだろうか？

須菩提は、申し上げた。世尊よ、実にその通りです。如来に智慧の眼はございません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、如来に法の眼はあるだろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、その通りである。如来に法の眼はございません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、如来に仏の眼はあるだろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、実にその通りである。如来に仏の眼はございません。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか、ガンジス川の砂の、ある限りの砂ほどのガンジス川になる時、これらにある限りの砂ほどの世界になるならば、これらの世界は多いであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、実にその通りです。それらの世界は多いです。

世尊はお答えになった。須菩提よ。それらの世界にある限りの衆生の、彼らのさまざまな考えの心の相続を、私は完全に知っているのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。心の相続というのは、それが相続ではない、と如来はおっしゃったのである。ゆえに、心の相続とされるのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。過去の心も認識されることはない、未来の心も認識されることはない、現在の心も認識されることは無いからである。須菩提よ。これをどのように思うか、この三千大千世界を七宝で完全に満たして、布施するならば、良家の息子であれ、良家の娘であれ、それに基づいてそれから、非常に多くの福德を生み出すであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、たいへんに多いのです。善逝よ、たいへんに多いのです。

世尊はお答えになった。須菩提よ。その通りである。その通りである。良家の息子あるいは良家の娘は、それに基づいてそれから、多くの福德の集まりを生み出すのである。須菩提よ。もし、福德の集まり、福德の集まりになるならば、福德の集まり、福德の集まりとは、如来は言われないのである。須菩提よ。これをどのように思うか。完全な色身の確立によって、如来は見られるであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、それは、そうではありません、完全な色身の確立によって、如来は見られません。それはなぜかと申しますならば、世尊よ、色身の完全な確立、色身の完全な成就と言われることは、その完全な確立が存在しないことである、と如来がおっしゃったからであり、ゆえに、色身の完全な確立といわれるのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。これをどのように思うか。すばらしい特徴によって、如来は見られるであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、それはありません。すばらしい特徴によって、如来は見られません。それはなぜかと申しますならば、如来によってすばらしい特徴と言われるものは、素晴らしい特徴が存在しないことである、と如来がおっしゃったからです。ゆえに、素晴らしい特徴と言われるのであります。

世尊はおっしゃった、須菩提よ。これをどのように思うか、如来がこのように考える。「私は法を説くのであると思う」と。そのように思うならば、須菩提よ。そのように見てはならない。如来が説いた法は、何もないのである。須菩提よ。誰かがこのように言う「如来は法を説いた」と。このように言うならば、須菩提よ。それは、そうではないし、誤った理解によって、私を誇ることになるのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。法を説く、とは認識されている法が説かれることが、法を説くと言われるのであって、それは、何も存在しないからである。

説法を聞く衆生も、説法を説く如来も、ともに存在しない

そして、世尊に長老須菩提はこのようにお答えした。世尊よ、未来の時に、衆生がこのような法を説くことを聞くことから、確かに信じるようになることがあるでしょうか？

世尊はおっしゃった。須菩提よ。彼らは、衆生でもないのである、衆生でないのでも、またないのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。もろもろの衆生と言われるのは、如来は、それらが衆生ではないと説くからである。ゆえに、もろもろの衆生と言われるのである。須菩提よ。これをどのように思うか。如来がこの上なく正しく成就された完全なる悟りに、仏の法は何かあるであろうか？

長老須菩提はお答えした。世尊よ、如来がこの上なく正しく成就された完全なる悟りに、仏の法が何もないことは、素晴らしいことです。

世尊はお答えになった。須菩提よ。その通りである。その通りである。その法はわずかも存在せず、認識されない。ゆえに、この上なく正しく成就された悟りと言われるのである。また、須菩提よ。その法は、平等であり、それに平等でないことは何もないから、ゆえに、この上なく正しく成就された悟りと言われるのである。この上

なく正しく成就された悟りは、無我と、衆生がないことと、生命でないことと、人間（ブドガラ）でないことと同じである。善良なすべての法は、直観において成就されることにおいて成し遂げられた悟りなのである。須菩提よ。善良な法、善良な法と言われるのは、それらが如来によって法でないこと自体であると説かれている。ゆえに、善良な法であるとされるのである。また須菩提よ。良家の息子であれ、良家の娘であれ誰かが、この三千大千世界のある限りの山の王たるスメールを、七宝だけでできた集合の大きな集まりにして、布施するよりも、この「智慧の彼岸に行く」経典から、わずか四句の詩頌だけでも取り出して理解し、他の者たちにも教えるならば、須菩提よ。この福德の集まりに、前者の福德の集まりは、百分の一にも匹敵しないから、原因の範囲にもまったく及ばないのである。須菩提よ。これをどのように思うか、如来が「私は衆生たちを解放するのであると思う」と、このように思うならば、須菩提よ。実にその通りに知られない。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来によって解放される衆生は、存在しないからである。須菩提よ。もし如来が、何かが衆生を解放するのであれば、それ自体、如来の我との想いになり、衆生との想いと、生命との想いと、人間（ブドガラ）との想いになるのである。須菩提よ。我に対する認識とは、その想いが無い如来が説くのだとすれば、それも子供じみた人達によって把握されるのである。須菩提よ。子供じみた人たちというのは、彼らは人ではないのである、と如来が説かれた。ゆえに、子供じみた人たちとされるのである。須菩提よ。これをどのように思うか。すばらしい特徴によって如来は見られるか？

如来は法を身体とするものであって、どのようにしても、決して認識されることはない

須菩提は申し上げた、世尊よ、それは、そうではありません、すばらしい特徴によって、如来は見られません。世尊はお答えになった。須菩提よ。その通りである。すばらしい特徴によって、如来は見られない。須菩提よ。もし、すばらしい特徴によって如来が見られるならば、転輪聖王も如来になるであろう。ゆえに、素晴らしい特徴によって如来は見られないのである。

そして、世尊に長老須菩提はこのようにお答えした。世尊がおっしゃったこの意味は、私が探求しましたならば、すばらしい特徴によって、如来は見られません。

それから、その時、世尊はこれらの詩頌をお説きになった。

私を色かたちとして見る者

私を言葉で認識する者は

間違った放棄から入門する者である。

それらの人々は私を見ない。

諸仏は法そのものである、と見よ。

導師たちは、法の身体である。

法そのものは、知らなければならぬものではないから

それは認識することが不可能である。

須菩提よ。これをどのように思うか、素晴らしい特徴によって如来、阿羅漢、正しく成就された仏である、と思うならば、須菩提よ。汝はそのように見てはならない。須菩提よ。素晴らしい特徴によって、如来、阿羅漢、正しく成就された仏が、この上なく正しく成就された悟りの直観を成就した仏であるわけではないのである。須菩

提よ。「菩薩乘に正しく入る者たちによって、何らかの法が完全に破壊され、あるいは、観念が切り捨てられるのだ」と、そのように思うならば、須菩提よ。そのように見てはならない。菩薩乘に正しく入る者たちによって、どんな法も完全に破壊されることも、観念が切り捨てられることもない。また、須菩提よ。良家の息子であれ、良家の娘の誰かが、世界をガンジス川の砂と同じくらいの七宝で完全に満たして、布施するよりも、誰か菩薩が、諸法は無我であって生じることはない、と寛容することを得るならば、それに基づいてそれから、非常に多くの福德を生み出すのである。また、須菩提よ。菩薩は福德の集まりを、完全に認識しないのである。

長老須菩提はお尋ねした。世尊よ、菩薩は福德の集まりを完全に認識しないのでしょうか？

世尊はおっしゃった、須菩提よ。完全に認識するけれども、誤って認識しないのである。ゆえに、完全に認識すると言われるのである。須菩提よ。誰かが「如来は去られた。来られた、現れられた、生きられた、眠られた」と、そのように言うならば、そうであるならば、私は語られる対象を認識しないのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。如来とは、どこにも去らないし、どこからも来られないからである。ゆえに、如来、阿羅漢、正しく成就した仏と言われるのである。

対象世界は概念でしかない。世界は凡夫が認識するにすぎない

また、須菩提よ。良家の息子であれ、良家の娘の誰かによって、三千大千世界のある限りの原子が、たとえば、原子の集まりのようなものになるまで、細かくすりつぶされるならば、須菩提よ。これをどのように思うか。原子の集まりは多いであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、実にその通りです。原子の集まりは多いのであります。それはなぜかと申しますと、世尊は、もし或る集まりが存在するならば、世尊は原子の集まりというお言葉を与えられなかったからであります。それはなぜかと申しますならば、「原子の集まりと言われたその集まりは、存在しない」と、如来がおっしゃったからです。ゆえに、原子の集まりと言われるのです。「三千大千世界と言われる、その世界が存在しない」と、如来はおっしゃったのです。ゆえに、三千大千世界と言われるのであります。それはなぜかと申しますならば、世尊よ、もし或る領域（界）が存在するならば、それ自体、全体として認識することになるからであります。「全体を認識することが説かれることは、認識ではない」と、如来はおっしゃりました。ゆえに、全体の認識とされるのであります。

世尊はお答えになった。須菩提よ。全体の認識自体は、言語活動である。その法は、言葉でないのであるならば、それも、子供じみた人たちが把握するのである。須菩提よ。誰かがこのように言う。「如来は我を見ることを説きつつ、如来は衆生を見ることと、生命と見ることと、人間（ブドガラ）と見ることを説くのである」と。そのように言うならば、須菩提よ。それもまた正しく語ることから語るものであろうか？

須菩提は申し上げた、世尊よ、それは、そうではありません。善逝よ、それは、そうではありません。それはなぜかと申しますならば、世尊よ、「我を見ることを説くことは、見ることでない」と、如来がお説きになったからであります。ゆえに、我を見ることとされるのであります。

まとめの詩頌

世尊はおっしゃった、須菩提よ。菩薩乘に正しく入る者たちは、このようにすべての法を知らなければならない。見なければならない。信じなければならない。どんな場合でも、法との想いにおいても住しないと、そのように信じなければならないのである。それはなぜかというならば、須菩提よ。法との想い、法との想いというのは、想いのないことである、と如来がお説きになったからである。ゆえに、法との想いとされるのである。また、須

菩提よ。菩薩大士の誰かが、世界を計り知れない、そして無数の七宝で完全に満たして布施するよりも、良家の息子であれ、良家の娘の誰かが、この智慧の彼岸に行く経典から、ほんの四句からなる詩頌でも取り出して認識し、読み、完全に理解し、他の者にも広めて正しく完全に教えるならば、そのことが、これに基づいてそれから、計り知れないほど多くの福德を生み出すのである。そのように正しく完全に説くならば、そのように正しく完全に説かない如くである。ゆえに、正しく完全に説くと言われるのである。

星のまたたき、燈、
幻、しずくの泡
夢、閃光、そして雲のように
作られたものを、そのように見なければならぬ

世尊がそのようにおっしゃったので、上座須菩提と、それらの菩薩方と、四つの集まり、すなわち比丘と、比丘尼と、在家信徒と、在家信女と、神と、人と、阿修羅と、ガンダルヴァの世界の者たちは喜んで、世尊が説かれたことを讃嘆したのであった。

「聖なる智慧の彼岸に行く金剛の刃」と言われる大乘の経典が終わった。